大津歴博だより

OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

2020
No.
120

contents

企画展 P1～P3 開館30周年記念企画展 聖衆来迎寺と盛安寺 -明智光秀ゆかりの下阪本の社寺-

学芸員ノートから P4～P5 明智左馬之助湖水渡りにまつわる絵葉書3種

収蔵品紹介 P6 「滋賀郡西国三十三所順礼歌」（北村幽安関係資料・本館蔵）

大津市歴史博物館
令和2年8月25日 発行

〒520-0037 大津市御陵町2-2
TEL(077)521-2100
http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/

大津市歴史博物館
開館30周年記念企画展

聖衆来迎寺と盛安寺
―明智光秀ゆかりの下阪本の社寺―

会期：令和2年10月10日（土）～11月23日（月・祝）

国宝 六道絵（閻魔王庁幅）
聖衆来迎寺蔵

重要文化財 十一面観音立像
盛安寺蔵

坂本の西教寺と聖衆来迎寺、兄弟のように似ています。

比叡山東麓の坂本地域には、たくさんの寺宝を伝えることで著名な2つの寺院があります。西教寺（天台真盛宗総本山）と聖衆来迎寺（天台宗）です。当館では、この秋に聖衆来迎寺と盛安寺（天台真盛宗）、来年の秋には西教寺の寺宝を集めた展覧会を開催する予定で現在準備を進めているところです。

この2つのお寺は、実は似たところを多く持っています。まず、どちらも歴史的に天台宗の寺院で、比叡山延暦寺の末寺ということです。つまり、ご寺宝は延暦寺とても深い関わりをもつものばかりということになります。ちなみに西教寺は、室町時代に真盛上人が復興して以来、延暦寺の中でも独特の派閥を持ち、明治11年（1878）には天台宗真盛派、昭和21年（1946）には天台真盛宗として独立しましたが、元が天台宗であることに変わりはありません。

比叡山延暦寺は、鎮護国家のためのお寺ですから、一般的にいう「檀家制度」の檀家さんはいません。一方の西教寺と聖衆来迎寺は、坂本をはじめ近隣に多くの檀家さんがいて、お墓もたくさんあることが共通しています。

西方極楽浄土に往生したいという、浄土教の寺院です。

次に、どちらも天台浄土教に深く関わりを持つ寺院です。西教寺は慈恵大師良源が復興、恵心僧都源信が伽藍を整備したといい、西教寺という名前も、西方極楽浄土の阿弥陀如来の教えを大事にしていることを表しています。ご本尊は、丈六の大きさ（約279cm）の阿弥陀如来坐像で、光背に飛天や化仏を具備する平安時代後期の像です。聖衆来迎寺も、恵心僧都源信が念仏道場として再興したといい、寺名の聖衆来迎は、極楽浄土から阿弥陀如来が二十五菩薩を引き連れて迎えに来ることを意味しています。どちらも阿弥陀如来像をはじめとして、たくさんの来迎図を所蔵しています。

天台宗の戒律を重要視した寺院でもあります。

鎌倉時代後期に、天台宗の戒律である「円頓戒」の宣揚につとめた延暦寺僧がいました。円観（恵鎮、慈威和尚）といい、5人の天皇に戒を授けたため「五代国師」という異名を持つ傑僧でした。円観は、京都の北白川に戒律のお寺、元応寺（元応国清寺）を建てましたが、後に後醍醐天皇の帰依を受けて、「国王の氏寺」とも呼ばれた

京都の法勝寺を復興しました。ともに天台宗の円頓戒の中心寺院になり、それぞれ「法勝寺流」、「元応寺流」とよばれました。ところが戦国時代に両寺は荒廃し、勅命によって法勝寺は西教寺に、元応寺は聖衆来迎寺に統廃合され、それぞれの戒壇の流派を受け継ぐことになりました。つまり西教寺と聖衆来迎寺は流派が分かれたとはいえ、同じ円観の始めた戒壇の流儀を受け継いでいるお寺で、それぞれの流派の中心地でもあるのです。

どちらも明智光秀にゆかりの寺院です。

明智光秀が下阪本の地に「坂本城」を築城したのは、よく知られていることです。西教寺には、明智光秀の正室、熙子さんのお墓があり、坂本城の部材の一部や、箱書に「明智公所持」とある南蛮花輪文匣同硯箱や銅筒といった、光秀の伝承を持つ宝物の数々を所有しています。聖衆来迎寺にも、坂本城から移築した表門をはじめ、熙子さんの戒名「福月真祐大姉」の墨書銘を有する涅槃図（今回の調査で戒名を確認）など、こちらも光秀ゆかりの品々が伝来しています。どちらの寺院も坂本の北側に所在し、山側にある西教寺と浜側の街道沿いにある聖衆来迎寺は、あたかも坂本城を北方から護る出城のような位置に所在しています。さらに、西教寺の末寺で、住職の隠居寺のような性格を持っていた盛安寺には、光秀の陣太鼓とされる太鼓や位牌が伝わり、江戸時代には「明智寺」と呼ばれるなど、こちらもゆかり深いお寺です。今秋の展覧会では、盛安寺の秀麗な仏像や仏画も展示する予定です。

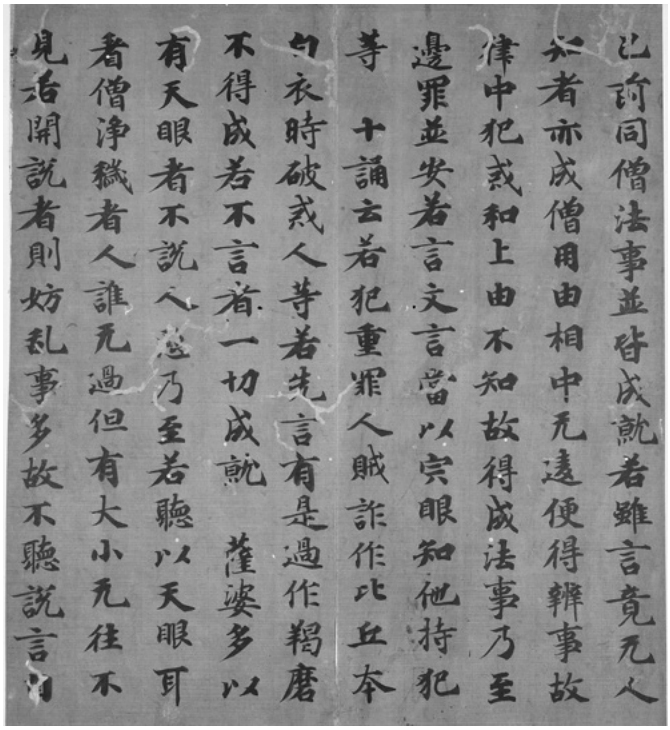
同じセットのお経の別の巻を分け持っています。

このように、とてもよく似た性格を持つ両寺院ですが、寺宝の面からも、ただならぬ関係があるように見えてきます。まず、奈良時代の「注大般涅槃経」について見てみると、このお経はもともと全30巻であったようです。そのうち、西教寺に第八巻が、聖衆来迎寺には第十巻が伝来し、他の巻のうち第二巻と第十二巻は津市の西来寺（天台真盛宗）に、第十四巻は京都市の毘沙門堂（天台宗）、第十九巻は横浜市の西方寺（真言宗）に現存しています。西方寺以外は天台宗で近い環境にあり、もともとすべてが比叡山にあったのかもしれません。そしてその同じ奈良時代の「注大般涅槃経」のセットのうち1巻を、何らかの理由で西教寺と聖衆来迎寺が泣き別れに持っているというのも、近い関係を伺わせるものがあるでしょう。

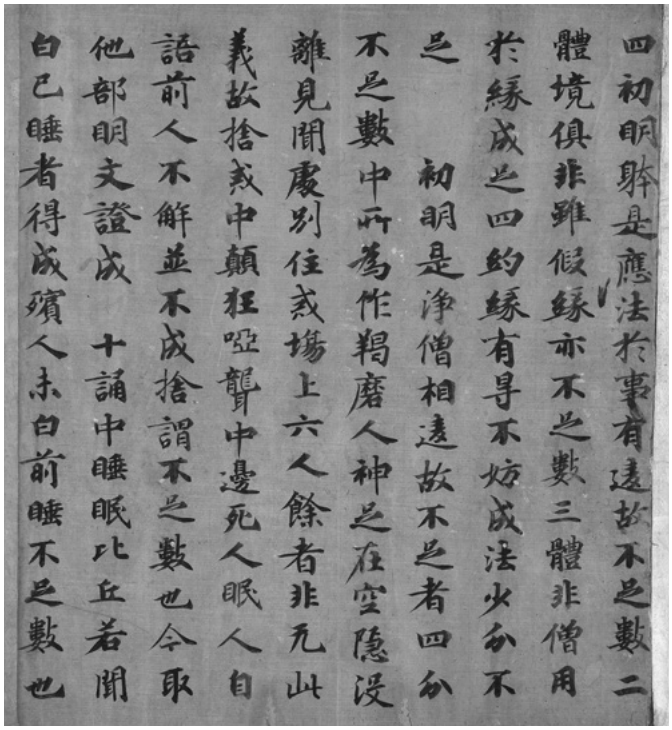
今回の調査で、同じお経の断簡を発見！

さらには、1巻のお経を分断した「断簡」を、それぞれのお寺が別々に持っていることが今回の調査でわかりましたので、そのいきさつを紹介しましょう。

現在、本年と来年の展覧会準備として、聖衆来迎寺と西教寺の寺宝調査を並行して進めているところですが、今年の2月には、西教寺の蔵のなかにある「古写経片紙集帖（西教寺書籍124　以降、西教寺本と呼ぶ）」【写真1】を調査しました。この資料は、古写経を切ったものをアルバム状に貼り付けた「手鑑」で、5種類の経典が



【写真 1】古写経片紙集帖 西教寺蔵



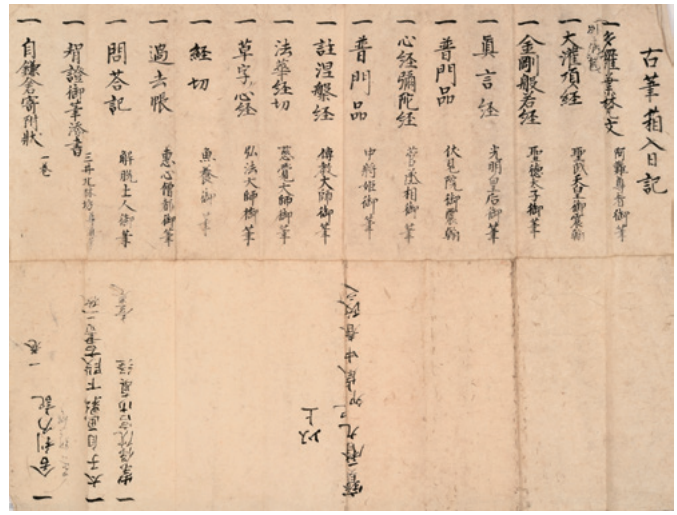
【写真 2】魚養筆巻物断簡 聖衆来迎寺蔵

貼ってありました。そのうちの5番目のものが、いわゆる「魚養経」と呼ばれる奈良時代後期のお経でした。この「魚養経」は、8世紀後半の能書家として著名な朝野魚養が書写したという経典のことを呼び、太めの謹厳な筆跡で知られています。

一方、聖衆来迎寺の寺宝調査を5月に行った際、こちらでも経典類をたくさん目にすることが出来ました。そして「魚養筆巻物断簡（以降、聖衆来迎寺本）」【写真2】という題のある巻子を調査した時、調査に同行をお願いしていた、国語学が専門で経典調査のスペシャリスト、大阪大谷大学の宇都宮啓吾氏から「『四分律刪繁補闕行事鈔』というお経の断簡で、他所にもツレがあります」とのコメントをいただきました。この『四分律刪繁補闕行事鈔』は、中国・唐時代の律宗の僧侶、道宣（596～667）の「律」に関する代表的な著作といわれるもので、「平安時代や鎌倉時代の写経はあるが、奈良時代のものは珍しいですよ」とのことでした。

後日、展覧会図録に載せる準備中に、この写真を眺めていたところ、朱点や白点で訓点が記されていて、たしか宇都宮さんは「興福寺の喜多院点ですよ」と教えてくれていたことを思い出し、さらに真ん中に折れ目のようなものがあり、その左右に五行ずつ文字が書かれていることに気づきました。そして、「西教寺のもこんなのではなかったか」と思いつき、早速、西教寺の「古写経片紙集帖」の写真と見比べてみたのです。すると、文字の書体や大きさ、真ん中に折れ目があり、その左右に5行の文字があるという形態など、まさに瓜二つの断簡に見えました。さらに朱点・白点の訓点もありました。私は訓点については素人なのでわからなかったのですが、くしくもこの「古写経片紙集帖」の後ろにこれを入手した沙門覚湛が「第五号　魚養筆　興福寺法相宗喜多院点」と記しており、この訓点が喜多院点であることがわかりました。これをみて、「これはかなり似てる。魚養経というだけでなく、ひょっとしたら同じ経典のツレなのでは」と直感しました。そこで早速、インターネットの大蔵経のテキストデーターベースを使って、西教寺本の文字の検索をかけたところ、検索結果は「四分律刪繁補闕行事鈔　巻上」と出て、ドンピシャリ。せっかくなので聖衆来迎寺本のテキストも検索してみると、同じ上巻の、しかも結構近くの部分であることがわかりました。そりゃ、似ているはずです。

これにより、奈良時代後期に奈良（おそらくは興福寺）で書写され、もともと1巻の巻子であった「四分律刪繁補闕行事鈔　巻上」が、いつの時代にか「折本」にされ（5行ごとに折れがあるのはこのため）、さらに断簡としてばらばらにされてしまったのですが、それが奇しくも西教寺と聖衆来迎寺にそれぞれ伝来していたのです。比叡山で分けたのでしょうか？



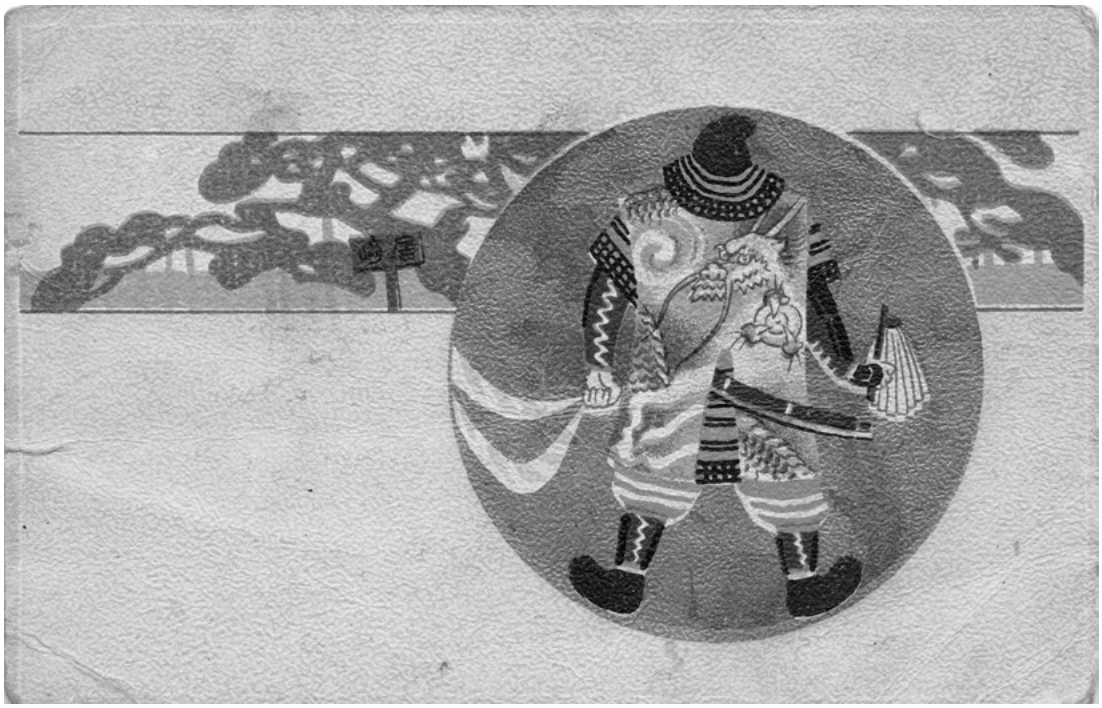
【写真 3】古筆箱入日記 聖衆来迎寺蔵

ちなみに、聖衆来迎寺に伝わる宝暦9年（1759）に記された『古筆箱入日記』（「崇保院宮墨蹟」という名前で登録されている）【写真3】という史料には、18件の経典類が記される中に「一、経切　魚養卿筆」とみえます。おそらくこれはこの聖衆来迎寺本のことをさしていると思われ、少なくとも1759年以前には「四分律刪繁補闕行事鈔　巻上」が断簡にされて、聖衆来迎寺の寺宝になっていたことがわかります。西教寺本は、奥書に前述の覚湛が明治31年（1898）に記していることから、いまの形態になったのはこの時とわかりますが、それ以前の詳細については不明です。なお、西教寺本の魚養経断簡は4紙貼り付けで、全部で31行分あり、より多く残っています。今回の展覧会では、この両本を並べて展示する予定です。ずっと離れ離れになっていましたが、時空を超えて何百年ぶりにお出会いすることになりそうです。

このように、何かと共通するものを持つ西教寺と聖衆来迎寺。当館では、今年と来年の2年にわたって両寺のご宝物を大々的に展示する予定です。ぜひとも見比べていただけたら、さらに共通するところや、ちょっと違うところを見つけていただくことが出来るでしょう。それこそが、比叡山の重厚な仏教文化の一端で、奥深いところです。これらを通して大津市の豊かな歴史と文化を感じていただけましたら幸いです。　　（学芸員　寺島典人）

【学芸員のノートから】

明智左馬之助湖水渡りにまつわる絵葉書　3種



左馬之助湖水渡り絵葉書
東京・松声堂　大正～昭和

大津にまつわる絵葉書

筆者が続けているライフワークのひとつに、大津にまつわる絵葉書の調査・収集があります。大津は豊かな歴史に恵まれた土地ですから、観光の土産物として作られた絵葉書のモチーフには、事欠くことがありません。また絵葉書は、催し物や建物の竣工などの記念品としても作られたので、県庁所在地である大津には、観光目的ではない絵葉書も多数存在しています。

大津市歴史博物館には、近江八景の絵葉書コレクション（これだけでも60種500枚以上あります）をはじめ、様々な絵葉書を収蔵していますが、それでも古書店やインターネットオークションをのぞいていると、まだまだ見たことのない絵葉書に出会うことがあります。

今回は大津に関する絵葉書のなかから、今年のNHK大河ドラマにちなんだ3枚をご紹介します。とはいえ、取り上げるのは明智光秀本人ではなく、明智左馬之助です。本来は秀満とした方が良いのかもしれませんが、ここでは絵葉書にあわせて左馬之助で表記します。

明智左馬之助湖水渡り

明智左馬之助は「湖水渡り」といわれる逸話で知られた人物です。記録や物語によって細かな内容が異なりますが、おおよそ次のような物語です。

本能寺の変によって織田信長を殺害した明智光秀は、つづく山崎の合戦で、羽柴（豊臣）秀吉に敗れたのち、坂本城を目指す途中で討たれてしまいます。その報を安土城で聞いた左馬之助は、一路、坂本城へと向かいます。その道中、瀬田橋を渡って大津へと差し掛かったところで、秀吉方の武将・堀秀政の軍勢に遭遇。左馬之助はそれを避けるために打出浜から湖へと馬を入れ、湖水を渡って坂本城を目指し、無事に坂本城へと入城することができました。

この一連の話の流れは、江戸時代初期に書かれたとされる『川角太閤記』の記述が基になっているので、その部分も紹介しましょう。

弥平次（左馬之助）、東より入口のはずれへ馬の頭を引き向け、海へさっと馬を乗り込み、うくに沈みにおよがせける。久太郎殿（堀秀政）方には、いまや沈む沈むと、面白げに見物してありけるところに、弥平次、馬の鞍坪をはなれ、さんず（馬の尻方向）へ乗り下がり、蔵の後輪に手綱を取り付け、志賀の唐崎の一つ松をめて（右手）へなし、弓手（左手）へ近く馬の頭を引きむけ、はやりクモ見えしかば、久太郎殿下知には、はやばや見物にてはなきぞや、海道筋へまわし、急ぎ乗り着けよ、あますなもらすなと下知して追いかけさせ給う。

『川角太閤記』では、まるで見てきたかのように湖水渡りの様子が記されています。馬で琵琶湖を渡るというお話は、現代風にいえば「映える」お話なので、様々に脚色されながら伝説や絵画などで表現されたのでしょう。

湖水渡りの絵葉書

左馬之助湖水渡り絵葉書　昭和戦前

前置が長くなりましたが、絵葉書もその表現のなかのひとつといえます。紹介する3枚の絵葉書のうち、上に示した絵葉書は最も分かりやすい構図で、湖を馬で渡る左馬之助が絵で表現され、馬が目指す向こうに唐崎の松の写真がはめ込まれています。伝説と一緒に名所として知られる唐崎の松を同時に紹介する趣向です。

ただし、この絵葉書の下に描かれた紹介文は、少々面白い文章です。「*（近江歴史）明智左馬之助光春大津の合戦に堀秀政の陣を破り、単騎馬を躍し湖水を渡り敵軍を驚かしつつ悠々と坂本城に入る*」と、ここでの左馬之助（光春は俗伝の名前）は、堀秀政の軍勢を避けたのではなく、破ったことになっています。もっとも、この絵葉書は3枚組で、他に弁慶と俵藤太が紹介されているのですが、弁慶の解説は「弁慶怪力を以て江州琵琶湖に沈みありし梵鐘を引上げ三井寺に納む」と書かれていますから、解説文を受け持った人物の脚色が、全体的に過ぎるような気がします。

この絵葉書を見たうえで、冒頭（4ページ）の絵葉書をみてみましょう。図柄は唐崎の松と人物の取り合わせですが、武将の手をよく見ると、手綱と思われる紐を左手に持ちます。この絵葉書は、東京の出版業者が発行したものですが、左馬之助が坂本を目指した目印が、唐崎の松だということが、伝説として定着しているからこそ、湖水を渡らない（渡った後？）の図柄が、ちょっとおしゃれな絵葉書として成立するのでしょう。

左馬之助駒止めの松

最後に3枚目の絵葉書を紹介しましょう。この絵葉書のタイトルは「（近江名所）明智左馬之助駒止めの松」。湖水を渡りきった左馬之助が、馬をつないだとされる松の写真です。絵葉書に写された松は現存しませんが、今は二代目の松が、柳が崎湖畔公園駐車場内に植えられています。ですから、松の場所が移動していないという前提で考えると、絵葉書の景色の向こうには、今は柳が崎浄水場があることになります。びわこ大津館（旧琵琶湖ホテル）がある柳が崎の湖岸一帯は、マンションなども建って、近年風景がすっかり様変わりしていますが、国道161号（今は県道）ができる昭和40年頃までは、田畑が一面に広がっていました。その雰囲気は、絵葉書にも垣間みられます。松の右隣にあるのは、井戸水を汲み上げて、農作物に水を与えるハネツルベで、このあたりではあちこちにあったものです。

さて、湖水を渡った明智左馬之助は、はたしてどこから上陸して坂本城にたどりついたのかという謎は、絵葉書では解けませんが、大正・昭和の観光絵葉書の素材として、湖水渡りの伝説が重宝されていたことだけは、間違いないようです。　（副館長　木津勝）

明智左馬之助駒止の松　昭和初期

収蔵品紹介

「滋賀郡西国三十三所順礼歌」（北村幽安関係資料・本館蔵）

「滋賀郡西国三十三所順礼歌」縦 16.5cm、横 11.8cm、19 丁
（右）表紙　（左）第一番札所満月寺の部分

今回紹介する史料は、江戸時代に「西国三十三所」の御詠歌を書き写した小冊子です。とはいっても、現在でも盛んな西国三十三所観音霊場の御詠歌ではありません。表紙に「滋賀郡西国三十三所順礼歌」とあるように、滋賀郡に限定した三十三所の寺院の御詠歌を書いたものです。

西国三十三所巡礼は平安時代後期に成立したものでしたが、江戸時代には、近江一国を範囲とした「近江西国三十三所」（寛文年間〔1661～72〕頃）、さらに範囲を限定したものとして、大津町を中心とした「大津三十三所」（元禄4年〔1691〕頃成立）や、膳所藩士の発願による「膳所三十三所」（宝永5年〔1708〕頃成立）といった都市部の霊場も登場します。

今回の「滋賀郡西国三十三所順礼歌」は、江戸時代前期より堅田郷士で茶人・作庭師でもあった北村幽安（祐庵とも）家に伝来したもので、裏表紙・同見返しに、文政9年〔1826〕10月、その子孫である「北村與之助政行」が15歳の時に書いたとの墨書があります。滋賀郡三十三所を巡って書いたというよりも、手習いのために書写した可能性もありますが、ひとまず江戸時代後期には、滋賀郡限定の三十三所巡礼が成立していたといえそうです。

そして、その札所となった寺院と御詠歌の一覧をみてみると、堅田満月寺（浮御堂）から始まり、下阪本の聖衆来迎寺まで、北は和邇、南は坂本と狭い範囲を巡るものとなっていたことがわかります。今回紹介の史料とは別に、同様の滋賀郡三十三所巡礼に関する刷物（年未詳・個人蔵）には、札所と札所の間の距離数が書き込まれていて、計算すると約38キロメートルになります。一日で回れなくもない距離です。ただし、幕末・明治維新期の廃仏毀釈や、明治初年の廃寺令により、現在は確認できない寺院もあります。今回は、札所と御詠歌の紹介のみになりますが、これを誰が選定したのか、何年頃に成立したのかなど、ルートも含め、改めて考えてみる必要がありそうです。（学芸員　高橋大樹）

札所（寺院）				御詠歌
1番	堅田	満月寺	まんげつじ	びわの海　くまなきかけは　浮御堂　もれぬちかひわ　みつるつきてら
2番	堅田	妙盛寺	みょうせいじ	松風の　音は緑の　妙盛寺　もらさすすくふ　みてにすかりて
3番	堅田	尊法寺	そんぽうじ	後の世を　頼心ハ　尊法寺　すくひの網の　ほかにもらすな
4番	堅田	寿寧寺	じゅねいじ	そのかみは　幾よ経ぬらん　寿寧寺の　庭にたへなる　松風のをと
5番	堅田	福聚院	ふくじゅいん	今のよに　よわひもながふ　福聚院　まいりてゐのる　のちの世のため
6番	今堅田	海蔵寺	かいぞうじ	そこふかき　すくひののりの　海蔵寺　まいりてむすぶ　ゑんはたのもし
7番	今堅田	圓成寺	えんじょうじ	罪ふかき　まよひごをひく　観音の　ミたうをかミて　みちひきをゑん
8番	真野中村	法界寺	ほっかいじ	あわれミの　心へたてぬ　法界じ　むすぶゑにしわ　真野中村
9番	真野沢村	宮寺神宮寺	みやでらじんぐうじ	はからすも　ちかひのかつに　神宮寺　入ルわきゑゆく　つみもむくひも
10番	真野沢村	浄国寺	じょうこくじ	西のそら　仏のさとの　浄国寺　ゆきてのほらん　はすのうてなに
11番	真野北村	願生寺	がんしょうじ	廻りきて　二世のねがひハ　願正じ　末たのもしき　身こそうれしき
12番	小野	花達院	かだついん	むすひをく　ゑにしくちせす　をのつから　観音堂の　ながきめぐみに
13番	小野	上品寺	じょうぽんじ	上品の　寺のはちすの　花ひらき　このよからミる　露のすみかを
14番	和邇高城	報恩寺	ほうおんじ	父母の　めくみをかゑす　報恩じ　誠をつくす　心高しろ
15番	和邇北浜	千手院	せんじゅいん	今爰に　たつねきたはま　千手ゐん　岸うつ浪に　はらうつミとか
16番	普門	専修院	せんじゅいん	ゑらびなく　五きやくの罪も　十悪も　専修のいんに　きゆる露霜
17番	普門	光明寺	こうみょうじ	へたてなく　てらも仏の　光明寺　直のちのよの　道しるべなり
18番	佐川	六時院	ろくじいん	のちのよを　ねがふ心は　六時いん　とのふるみちハ　さ川なきなり
19番	伊香立下在地	安養寺	あんようじ	後の世に　ゆきてうまれん　安養じ　たのミをかくる　あさないふなり
20番	伊香立北在地	宮蔵寺	きゅうぞうじ	幾度も　たのみをかくる　宮ぐらの　寺にあゆみを　はこひこそすれ
21番	伊香立北在地	昌翁（峯）院	しょうぽういん	有かたき　ミのり近江の　昌翁いん　きくとひとしく　ねがひのちのよ
22番	南庄	積善院	しゃくぜんいん	年月を　かさねてゐのる　積善いん　なそかはつれん　弥陀のミくにへ
23番	大野	如意寺	にょいじ	難事も　こゝろの如　かのふてら　いのるしるしは　有明の月
24番	雄琴	普門寺	ふもんじ	ひとたびも　まいりてむすふ　ゑんの綱　あまねきかどの　寺にくちせぬ
25番	苗鹿	法光寺	ほうこうじ	世の中に　はなつひかりの　寺なれは　草葉の露も　るりとうるをふ
26番	大野	十輪寺	じゅうりんじ	神仏　しもハならくの　そこまても　ゐちミののりの　とうのわの寺
27番	上坂本	大正寺	たいしょうじ	ひとゝせを　かそゑてみれは　大正の　つきひのひかり　たゑぬともしひ
28番	上坂本	生源寺	しょうげんじ	むまれたる　みなもと寺に　きてみれハ　心のにこり　すみわたりゆく
29番	上坂本	波止土院	はしどいん	此しやはの　はつくの海を　のりの舟　こへて浄土へ　波止土のゝ寺
30番	上坂本	普門寺	ふもんじ	道筋は　をふきちかひの　普門てら　ゑらばすすくふ　大ひなりけり
31番	下坂本	真光寺	しんこうじ	たねんなく　みのりの道を　真光寺　ゆかん願ひハ　極楽のきし
32番	下坂本	観福寺	かんぷくじ	いつまても　ねかふ心は　観ふくじ　うき雲はれて　ゐ出るつきかけ
33番	下坂本	来迎寺	らいこうじ	ついにゆく　弥陀のみくにゑ　来迎寺　ミそぢみところ　まゐりをさめて

※「滋賀郡西国三十三所御詠歌」の表記に従い列記しました。21番の昌峯院の所在地は、正しくは生津です。